

何処どこに住んでいるのか。誰と暮らしているのか。そして生まれ育ちは――。

構えて尋ねられたくはないことだ。答え甲斐がいがないようにも思われる。

現住所は尋ねられれば差障りさしさわのないかぎり教える。手紙や書類にも欠かすわけにいかない。あちこちに登録されている。一切届け出ることのできぬ境遇に追い込まれれば、人の生き心地は一変する。しかし住所を書きこむ馴なれた手が途中で停まりかける。にわかには知らぬ所番地に見えてくる。ほんのわずかな間のことだ。既知が昂こじると、未知に映ることはあるものらしい。

鼻かアとばばア、と『濼東綺譚ぼくとうきだん』の「わたくし」は派出所の巡査に、住所氏名ばかりか家族のことまで問い詰められて、口から出まかせに答えている。女房とお袋、妻と母親とは男にとつて、いずれ正しい答えなのかもしれない。しかし紙入れの中に、戸籍抄本と印鑑証明と実印を、偶々たまたまであったかどうか、携えていた。

話がいつか自身の現在住まう界限かいわいをめぐっている。相手は土地のことを知っていた。一時期しげ繁かよく通った程度のことらしいが、そこに居を定める人間に出会ってみると、懐なつかしくなったものと見える。話は親密になる。ところが、現にそこで暮すほうがそのうちにわずかずつ、話に置かれる。相手の言うことはさらに仔細しさいになる。四つ角あたりの光景が立ち上がる。声から雰囲気も伝わる。季節も時刻もある。それにつれて現住の人間は、知らぬ土地の話聞かされているような、述懐すきまされているような、隙間を覚える。相手のは記憶だが、自分のはただの、知識のようなものではないか、とひそかに怪しむ。

深夜に風が出る。一吹き山から降ろしたように始まり、長い短い間を置いて寄せる。寝床から耳を遣^やっていると、風につれてあたりが昔の土地へ還^{かえ}っていく。畑がひろがり、藪^{やぶ}も林も風に走り、平らたく均^{なら}された土地がゆるやかな起伏を取り戻す。荒涼感が極まって、長いこと避けて来たが落着くべきところに落着いたような安堵^{あんど}が、ないでもない。しかしかりに土地が昔へ還ったとするなら、たかだか何十年來の新参者は落着くどころか、ここにいないことになる。居を求める若い夫婦はまだここを尋ねてもない。この土地のことも知らずにいた。あるいはまだ互いに出会ってもいない。ここで育った子供たちは、生まれていない。風が長く吹きつのも、居ながらの不在感には、なまじ居ることの自明さよりも身に染^しみる。長年ここに居ついてしまったという感慨が、まだここに到^{いた}り着いていないような怪しみへ、振れる。

風の中を、風に膨らんだ大男が行く。風の合間に、辻^{つじ}にさしかかる。そこで立ち停まり、どちらへ行ってもよいようなものを、目的を知っているかのように道を選ぶのは、前から惹^ひかれるか、後から押し出されるのか、とその感じ分けもつかず、徒労感に堪えず、風のまた吹き出したのにまかせて足を踏み出す。こうして行くうちにやがてひとつの辻に出会って、辻そのものが生涯の道しるべとなり、徒労感は去り、足取りは定まるのではないか、と期待を先へ送る。しかしまた、その辻はじつはとうに知らずに通り越していて、取り返しがつかず、投げやりな踏み出しは背後へ置き残される弁明の粘りつきであり、そのしるしに三步目にはおのずと決然として、自身にも他人にも容赦^{おおまた}のない大股の歩みになっているのではないかと疑う。

男の影はこちらへ向かって来る。呻^{うめ}くような息づかいの聞こえそうになるまで近づいては斜めに逸^それて行く。風の合間に、繰り返し、同じ辻にかかる。

辻で道の尽きるのを願っている。

馬道の辻と呼んだ。峠から来る道が切通しになり町へ抜けるそのあたりになる。古くは湊へ通う荷馬の間道であつたらしい。同じような道が左右から合わさる。どちらも馬道と言つた。近くに単線の一輛か二輛連結の電鉄の小さな駅があり、その駅名も馬道だつた。

港のある市街まで歩いていくらかからぬ距離だが、海の気配はまだない。山が迫り、どんな陽気にも湿気が底に淀んだ。町へ抜けて、山を背負つて並ぶ家々も黒く湿つて見えた。表戸を開ければ古畳と黴の臭いが鼻につく。

朝原は街へ向かつて右手のほうの道を降りて来た。十八になつた年の、梅雨の晴れ間の午前のことだ。申し渡すことがある、と父親に呼びつけられた。父親との仲が陰悪になつていた。叔父が間に入り、馬道の上の村の親類の家へ預けられてから三ヶ月になる。

父親の憎悪の得体が知れなかつた。朝原にもそれなりの屈折はあつた。父親の四十年代なかばの、まだ三十前の後添えの子になり、腹違いの兄姉たちとも年がだいぶ離れている。あれは連れ子だという噂が中学生の朝原の耳まで伝わつた。もうひとつひねつて、あれは父親がよそに産ませた子で、身寄りもなくなつた母親が因果をふくまされ自分の腹の子として後添えに入つたのだという噂もあつた。土地の子は性に目覚めるよりもひと足先に耳の大人になる。

しかし噂が届いた頃には、自分の出生を疑うというようなことは朝原の内では片づいていた。男の子が鏡を、当時は人目を盗んで、のぞきこむ年頃になる。鏡の内に時は父親の、時には母親の面相を認めて目をそむけた。そこは並みの子よりも敏感だつた。母親は父親にも兄姉たちにも、万事において遠慮していた。相手の感情が走りかけると、目に見えておろおろする。しかし、荒れない家だつた。父親は当時として家

長専横というほどでもなかった。兄妹たちは母親にたいしてだけでなく、父親にたいしても、それぞれ分別臭い距離を取っていた。腹違いの末の弟には、まともに相手にするには年が隔たっているということもあったが、可愛がりもしないかわりに邪慳にもしなかった。口数のすくない家だった。

表情の乏しい家だった。その中であつて末の腹違いの子がどう育ったか、手のかからぬ子だと早くから親類たちには見られ、やや長じてからは、言われなくてもやるべきことはやると感心され、自分では遠慮して暮した覚えもないが、実際にどんな顔を見せていたかは、本人には知れぬところだ。朝原の十歳の時に姉が嫁ぐことになり、それについて家の内で多少の悶着があり、母親がその圏外でまたおろおろと取りなしで回るのを、急に鬱陶しいように眺めた。中学生になり、ある晩、成人した二人の兄が母親と食膳に向かつて三人して黙々と飯を食べているのを、見てはならぬ光景のように、熱を出して寝ていた部屋から、あいだに一間隔てて眺めた。母親の胆がめつきり据わって見えた。二十になったばかりの次兄が港のほうの中年の女にかかずらつていた頃になる。朝原が高校生になって一年半ほどのうちに、その兄たちも続いて世帯を持って家を離れた。

切通しにかかった時、朝原は不思議な恍惚感に入った。山の高いところに、鬱蒼とした梅雨時の繁りのあちこちから、薄紫の花が舞いはじめた。暗い藪の奥から無数の小粒の白い花が顫えた。潮の音がかすかにこもった。両側の崖にはさまれて、行く手に馬道の辻が今日はいくつきりと見えた。手に取るようで、いつまでも、たどりつけそうにもない。自分は生涯、こうしてあの辻へ向かつて歩き続けることになるのではないか、と夢のようなことを思った。

次兄の婚礼の近づいた頃、何かの用に取り寄せられた戸籍謄本を、朝原がたまたま

誰もいない居間の小机の上に見つけて手に取って眺めるうちに、父親が廊下の障子の端に立った。合った目を逸らしたその眉間に、うとましげな皺が寄った。朝原にとって膳本の記載に何の問題もなかった。秘密を探るような関心からもとうに卒業していた。しかしそむけた父親の目の色から、自分が膳本を、仔細に読んだ覚えはないが、しげしげと見ていた、すくなくともその顔つきになっていたことを、遅れて感じさせられた。父親は何も言わずに居間を通り過ぎた。膳本を小机に戻す手が、ちよつと宙に迷って、後暗いようになった。いましがたの父親の顰めが、小机の前からしかつめらしく立とうとした息子の眉間に、乗り移った。そのとたんに、自分のものとも思われぬ忿怒が押し上げた。眼が険悪に剝かれた。父親と自身と、どちらへ向けられた憤りだか分からない。あれが朝原のほうの、初めの兆候だったか。

十七の歳に、ほかの学校だが一級下になる娘と恋をした。放課後や休日に二人で過ごすことが多くなったという程度の、年頃としてもまず月並なものだ。ところが噂を耳にした父親の反応が意外にけわしかった。息子を呼びつけた時には、市街の反対側に住む娘の家のことを調べあげていた。占ってもらったら吉くない縁だと強く戒められた、と父親は付合いをやめるように迫るばかりで、ほかの点で娘の家に難をつけるでもなかったが、息子は黙って恋人の身辺を探られたことにこわばった。父子の間にもこじれが始まり、食膳に向かいあう時にもお互いに口数がすくなくなった。母親は例によつてただ両方の顔色を窺って気を揉むばかりだった。次兄の件では中年女とのむずかしい関係に父親は何も言わず、そのことに触れるとただ苦々しい顔をして、眼をそむけるばかりであったのにひきかえ、自分は人目のないところで手を取りあう以上のことはしていないのに、父親のこの迫り方は何だ、と息子は腹立たしさを通り越して怪しんだ。しかしここままでならまだしも、これもよくあることと言えた。

女の魔性と、ある晩、そんな言葉を父親は息子に面と向かって口にした。十六の少女にたいして何を言うか、と息子は啞然としたその後から、半年も前に初めて知ったのと同じ忿怒がまた押し上げ、父親に掴みかからんばかりになったところで、体格の良かった父親よりも自分こそ今ではいかつい身体になっている、しかもそっくり似ていることに怖気をふるった。父親の顔を見れば、居間の小机の前で謄本を手に自分でも覚えのある面相に両の眼を剥いて、眉間に縦皺をきつく寄せているのに、ゆるく開いた口もとが、嗚咽を洩らしそうに、いっそう無惨な嘲笑へ崩れそうに、わなないた。息子は黙って部屋を出た。

それ以来、父親は女の誑しだの手管だの、その類いの言葉を、激昂の果てにはなるが、その興奮のむしろ引きかける間際に、ぼそつと吐くようになり、時には露骨なあてこすりにまで及んだ。息子はそのたびに屈辱感に慄えが走り、しかし言葉を返せば恋人を同列に置いてさらに汚すようで、物も言えず睨み返すうちに、父親の眼は濁ってくる。息子の顔が像を結んでいるようにも見えない。まして息子の恋人の、顔かたちも浮んでいないようだ。姿を見かけたこともないのだ、と息子はおいおい呑みこんだ。

女は何もかも、初めから知っていて、知らぬつもりでいるので始末に悪い、と父親がある日言った時には、一体、何処の女のことを思っているのだ、と息子はもう白っぽい膜の掛かった父親の顔を見た。

それでも言葉の力はおそろしい。父親の言うことは冷静に聞けば、ませた土地の少年なら口走りそうな、男が女を貶める時の常套句をいくらかも出ない。恋人には触れもしない、と息子は隔てていたが、言葉に呼ばれて、自分には届きそうにもない遠くに、見も知らぬ女の影がふくらむ。顔も見えないその女を夜の夢の中で、父親よりも露骨

な言葉で責めている。逃げ場のなくなるまで責めまくり、屈した女を意のままにしよ
うとすると、「何もかも知った」その顔に、眉まゆが浮かびかける。

父親よりも母親のほうに、朝原は腹を立てた。次兄の騒ぎの時には腹が一度に据わ
り、すこしも騒がず次兄の心のおさまるのを気長に待ち取って、親父よりも母さんの
ために、としまいには言わせたものなのに、今ではすっかりもとの気弱さに戻って、
父親の激昂におろおろとして為なすすべを知らないのはまだしも、女を辱はかしめる、聞
くに堪えぬ言葉が父親の中から出るたびに、悪びれたみたいに、うつむいてしまう。
まるで身体から恥じているように息子には見えて、いよいよ鬱陶しいばかりか、そう
やって母親が遮りもせず吸い取ってしまうので、雑言でしかないものがどこまでも
走って、何か取り返しのかかぬことになりはしないか、と父親のためにおそれたこと
もある。

うなだれた母親の姿を、理も非もないような父親の責めの、これが内実か、と眺め
たこともあり、嫌悪を堪こえて、親たちの初めの経緯など知ったことかと打ち払ってか
ら、それがなければ自分は生まれていない、と呆あれた。あやまって、お父さんにあや
まって、と母親はそればかり繰り返した。

恋人とはひきつづき三日置きほどに逢あっていた。父親とのことは言わずにいたので、
朝原の口は重くなる。それにつれて相手の口数もすくなくなり、手を取り合うことも
なく、早目に別れて帰る道々、朝原はそのたびに、からだを求められるかと用心され
ていたなと気がつく。まったく誤解だったが、時折二人の間にはさまった沈黙を思い
出すと、はずみに引きこまれたら自分は何をしでかすかわからないと暗くなり、やは
り出生に何か尋常でないものがあるのではないかと古い疑いが蒸し返され、あれこれ
印しるしを探るその傍から、いよいよ父親に似てくる歩き方を見ていた。

父親よりも十歳ばかり弟になる叔父がある日、父子の諍いさかいの場に居合わせて、父親の雑言を黙って聞いていたその後で、甥おひをそつと外へ誘い出して並んで歩きながら、よく辛抱している、とまずいたわってから、あれは年のせいだ、兄貴も還暦を過ぎて先祖返りしたらしい、わしらの親父もあの年の頃から人が変わった、祖父じいさんも、わしは知らないが、そうだったと聞く、と話した。この祖父というのが昔、今ではわかばかりになったが一代でこの家の土地を殖やした人で、五十の坂にかかる頃にはごく円満になっていたのが、六十を越すとどういものか、女というものに、何処どこの誰とは限らず、ひどく悪あしざまにあたるようになり、そのために家の男たちとの諍いさかいが絶えず、若い頃の因業いたの祟りたと周囲で噂されたものらしいが、それにしても、金を貸しつけて土地を掻かき集めた因果がどうして、晩年になり女にたいする悪念となって出るのか、わけが知れない、と叔父はこぼした。しかし兄貴の、からだのほう心配だ、とつぶやいた。親父はそうなってから長くはなかった、祖父もまもなくだったらしい、と言う。

朝原にとってこそわけのわかった話ではなかった。それでも得心のようなものはあり、それからは父親に向かつてよほど余裕をもって対せるようになった。父親との和解のきっかけを待ってもいた。それにつれて父親は息子を避けるふうになった。ときおり一人で激昂げきこうして息子を呼びつけ、荒い言葉を投げつけても、そろそろ例の雑言が出てくる頃かと息子が待ち受けていると、父親の眼は落着きがなくなり、睨にらんでいるようで、視線をわずかずつ逸よらす。冷静に構かまえているのが太々たいたいしいように見えるのだろう、と息子は取っていたが、ある夜、父親のうとましげにそむけた眼の色に、覚えのあることに気がついた。膳本をのぞく末の腹違いの子からそむけた眼とは違った。夜更よふけに次兄が帰って来る。女に会って来たことは、当時の中学生にも、おいのよ

うなものからわかった。平静に迎える母親の顔にもそれが映っていた。父親は居間を立つ。あの時の眼だった。男と女が触れ合うとはどんなことか、朝原が初めて、想像を素通りして実感として受けたのは、あの父親の眼の色からだった。

あの嫌悪が今、自分に向けられている。父親の眼の色を幾度確かめてみても、それに間違いはなかった。恋人と逢うことは、ほかの都合も重なって、さらに間遠になっていた。二人でいる時も、どちらからともなく、間隔を取っている。お互いに、至る所に潜む禁句を避けるような会話になった。逢って帰って来てすぐに父親に呼びつけられるということもなかった。しかし父親に眼をそむけられると、女に触れて来た次兄のにおいが自分の身体から立つ。恋人という言葉も剥ぎ取られて、女の肌が見える。女のためなら親でも殺しそうな顔だ、と父親は次兄に背を向けて呻いたものだ。どの程度のことを自分については想像しているか知らないが、叔父が最後につぶやいたことが思い合わされて、父親のために吉くない徴のようで、考えこんだ。お互いに眼も見合わせぬことが何日も続いた後、しかし、父親は意外なことを口走った。

お母さんも、お前のことを気味悪がっているぞ、そばに寄られるとぞっとすると泣いていた、と言った。

聞いて初めに来たのは憤りでなく、とうとう狂ったか、叔父のおそれたのはこのことだったか、と恐怖とも後悔とも、何ともつかぬ感情だった。父親の表情が読めないので、助けを求めて母親の顔を見た。母親は激烈な言葉に触れた時の例で、責めが我身に向けられたようにうなだれていたが、いつもとは違う印象を受けてよく見れば、低くうつむきこみながら、両手を膝に重ねて坐る姿が、背から腰まで静まって、すべて承知の上の、まるで正念を据えた様子だった。結んだ唇は取りなしに入ること拒んでいた。いましがた二階に呼びに来た母親の、どこかむごいようだった眼を朝原は思い返し、畳を踏み鳴らして部屋を立った。

悪念に支配されたのは息子のほうだった。悪念は澄んだ心に似ていると知った。いまさら恨みも憎しみも動かない。思い悩みもしない。ただ悪念に満たされている。透明に飽和して、波も立たない。反転すれば満足と重なりそうだった。家の中での振舞いは変わらなかった。むしろ端々で立居が普段よりも定まった。物腰そのものが日に日に大人になる。どうかすると青年を通り越して壮年になっている。食膳で親たちと向かいあっても、一切口をきかなかった。こわばった沈黙ではなかった。自分の拒絶に自分で反応して神経が騒いだり振れたりすることもない。親たちにしてみれば、物を言いかけようにも、かえって取りつく島もなかった。

その親たちの前で黙って飯を喰いながら、すべてはこちらの邪推ではないのかとすこしも疑わぬ自分を怪しむことがあったが、とうに決定していることを徒らに悔んで取り返そうとするような姑息さをうとんで、動揺も起らなかった。食欲も衰えぬ息子の前で親たちが背からしぼんでいくように見えた。ある時、晴れた日の朝飯時なのに、悪い夢のような光景が浮かんできた。見も知らぬ大男の客がいつかこの家に居ついて、主人の座まで奪おうとしている。自分を満たしているのは、透明ではあっても、やはり恐怖なのではないか、とその時には疑った。つとめて平静にしている親たちの顔に憔悴が目に立つようになった頃、叔父が間に入った。

叔父に伴われて家を出て馬道の辻にさしかかった時、じつはお前を上村へ連れて行ったのはこれが初めてではないのだ、と叔父は言った。その親類の家に朝原は子供の頃からしばしば遊びに行つて馴染んでいたが、叔父と一緒に訪ねた覚えはなかった。まだ満で一歳と、半年ほどの頃のことだ、リヤカーに載せて一人で引いて行った、と叔父は話した。積んだ蒲団の上にちよこんと坐つて目を睜っていた顔が今でも見えるようだ、と楫棒の間からちらりと振り返る仕種をして、秋の暮れ方のことだ、と春先

の午前の辻を見渡した。祖父は亡くなっていたが、大叔母たちが故人の乗り移ったような難儀なことを言い出して、朝原母子が一時、上の村に預けられたことがあるという。当時まだ三十代なかばの叔父は半端な暮らしをしていた都会から呼びつけられ、死んだ父親からの勘当を解くという条件で、悶着の後の始末をさせられることになり、引越しの車まで引く次第になった。何も知らずに運ばれて行く子が不憫だった。しかしあまりおとなしくしているので時々振り返ると、道の左右をめずらしそうに見まわしている。心細そうな様子もない。そう言えば、母親が取り乱している時にもこの子はめったにぐずらなかった。何もかも呑みこんでいるように見えて、叔父はよけいに不憫になった。坂にかかり切通しを一気に抜けて、右手の山を見あげて息を入れると、山はもう高いところまであらかた翳っているのに、尾根に近い一箇所が西日を受けて紅く照っていた。何の木だろうな、とたずねるように振り向くと、子供も眼から吸いこまれそうに紅葉を見あげていた。

朝原のことは、いつまで上の村に留まるにしても、来春には都会の大学へ出すということに、叔父が話をつけて来た。その後に、近くの都市で暮す長兄が、勤めにはここから通うことにして、家族を連れて入るということだった。子供の頃から見馴れた二階の天井の低い部屋に朝原はすぐに落着いた。家の主人は幼い朝原が叔父の引くりヤカーに載せられて着いた暮れ方のことを覚えていて、人見知りもせずにつつとあがって来た子をいつそうちで貰おうかとまで思った、と懐かしそうにした。そう言いながら、中学生を頭に三人も子供がいる。貰われていたら後が大変だった、と朝原は大人びた口をきいた。

家のことが遠くなった。まるで叔父と馬道の辻を渡ったのを境のように、と朝原は自分の気持をまた怪しんだ。朝には高校へ通うのにその辻を突っ切る。そのまままっ

すぐに行けばすぐに家の前を通る。その道は避けて辻の先から線路を渡って逸れるが、家を出されているので当然の遠慮だと思っただけだった。そこへ半月後の土曜に叔父が上の村まで訪ねて来て、家には帰ったかというようなことをたずねるので、親の様子をうかがいにも行かずいることを咎められるのかと思ったら、そうか、それならいいが、当分家には寄るなよ、と言う。聞けば、ひと月も離れていればおさまるものと叔父は踏んでいたが、朝原にたいする父親の怒りは一向に解けない。昼の内はむつつりとしているが夜が更けると、寢床に入ったのが撥ね起きて、母親を相手に、太々しい人間になった朝原のことを罵りまくる。物のわかった顔をして何をしでかすかわからない男だとまで言う。それはまだしも、この前の日曜には、明け方に息子が家の中に忍びこんで何かを探っていた、と騒ぎ出した。

叔父は自分にたいして多少の疑いを残して帰ったな、と朝原は後で感じて、自分ばかりにどうしても必要な物を家に置いて来たことに気がついたとして、夜明けにこつそりと取りに行くようなことはするだろうか、しないだろうか、と考えるうちに、また十日ほどもしてやって来た叔父は朝原を外へ連れ出して、どうもわしの思っていたのとは違うようだ、と頭を横に振った。親の家は玄関にも裏の戸口にも、夜には内から心張棒を支っているという。わしらの祖父さんも晩年に、同じことをしたそうだと叔父こそ恐ろしげにしていた。営々として築いた家産を、女のために心の晦んだ男に、息子だか誰だか知らぬが、奪われるような妄想に取っ憑かれていたらしい、と傍にいる甥のこともしばらく忘れた様子で考えこんでいたが、やがて甥の顔をまともに見つめながら、どうしてこの子が、まだ女の祟りというような

年でもないのに、そんなに怖いのだろう、と一人で首をかしげ、くれぐれも家に、近づきもするなよ、姿を見せるな、いいか、と念を押してそそくさと帰った。

通学には馬道の辻を避けてかなり遠回りの道を取った。夜が更けるにつれて、何もかも知った家のことなので、戸口に支った心張棒がしきりに浮かんで、狂ったとしか思えないその用心が身にこたえた。ある夜、暗い顔つきからうっすらと笑っている自分に、だんだんに気がついた。たしかに、戸口を塞いだところで、裏手の雨戸に敷居の甘くなった箇所があり、閉め出されたはずの次兄が朝になり二階の部屋で呑気に寝ていたこともある。親たちもそのことは知っているはずだった。それこそ間の抜けた戸締りになるが、それを思っても可笑しさはふくらまず、斜めに突っ張った太い黒光りする天秤棒がよけいに、魔除けの呪いに見えて、親の敵意に寒気を覚えながら、しかし薄笑いは口もとから引かない。

こそそと裏の雨戸などはずさなくても、あんな戸締りは表から、その気になれば、いくらでも破れる、と幾夜か後に寢床の中から、自分で聞いたこともない声で呻いた。何の感情も伴わなかった。

また半月もして叔父がやって来た。父親は末の子が自分の種ではないようなことを言い出したという。母親はもう抗弁する気力も失せている。顔も背恰好も似ていることはもう目に見えているが、叔父は当時土地を離れていて、物の言える立場にはないので、叔父叔母たちに相談すると、そんなことは経緯からしてもあるはずがない、父親もそれまでそれらしい疑いを素振りに見せたこともない、と揃って一笑に付す。妄想であることは間違いない。しかし兄貴の言うことがあまりひどいので、聞いてお前まで凄くなってくれては困るから、以後、よけいなことは一切伝えないのでそう思っ

ってほしい、と叔父は申し渡した。お前に格別の落度はないことはわかった、だから

気に病むな、と取りなした。親のことも心配することはない、お前の話をはずせば、夫婦の間があれであれなりに、おさまるから妙なものだ、家の内は綺麗きれいに片づいてい、と笑って帰って行った。

その家の小学校三年生の末の女の子が二階の部屋へよく上がって来て、朝原が坐り机に向かっている間も、そのうしろで畳にべたんと坐りこんで黙って本を読んでい、る。ある日、沙漠さばくに行ったことある、と背中からいきなりたずねた。行ったことないと答えると、オアシス見たことある、とたずねる。妙な質問の重ね方だと思って振り向くと、蜃気楼しんきろう見たことある、とまたたずねる。大真面目おまじめな顔だった。自分の知識に得意になっている様子でもない。たずねている。修学旅行より遠い所へ行ったことはないんだ、とその場はやり過ぎしたが、それからというもの、そのつどやはりいきなり、インドに行ったことある、とたずねて、ないと答えても、大きな睡蓮すいれん見たことある、と重ねる。アフリカ行ったことある、小さな人見たことある、とたずねる。世界中を歩き回っていないくは済まないように初めは困惑もしたが、そのうちに朝原も聞かれれば物の本で読んだ限りのことを話すようになり、受け売りの、口から出まかせだったが、話し方がなかなか仔細しさいらしく堂に入って来た。

昼間は学校に通い、例の娘はほんとうに朝原のことを避けて逢あわなくなっていたが、そろそろ受験勉強に精を出さなくてはならず、親類の一家との付き合いもあり、物を思う隙ひまもなかった。しかし夜が更ければやはり、親の家ではまだ心張棒を戸口に支っているのだらうかと考えて、底無しの気鬱きうつへ引きこまれそうになると、たずねて目を見つめる女の子の顔を思った。あんな物語りをしながら自分は馬道の辻の先にも行けな、い人間ではないか、と慚然ふぜんとさせられることもあったが、女の子の夢こたに応えて、実際に世界中を歩き回った末にもうあの辻の先へも行くまいと心を定めた人物に自分を

見立てると、想像ながらわびしくて気持が良かった。

夢の中に辻の見えることがあった。辻だけが見えて、何かが起こったようなのに、人の姿はない。あるいはこれから起こるのだろうか、と切通しの間から窺う自分も、影が薄れていく。

その馬道の辻を、たまたま人に声を掛けられて、良いお天気だと挨拶を返す間に、朝原は通り過ぎた。あとは親の家までまっすぐ、十分とはかからぬ道になる。切通しに入った時から始まった恍惚感はまだ続いていた。背後にいよいよ数を増して、薄紫の蝶が谷の上へ舞いかかる。暗い藪の中から白い星が群れて顫える。潮の音が間を置いて甲高いように鳴る。そして辻へ向かって、生涯そこまでたどりつけぬことに堪えた男がそれでも一步一步、事を為しに行く足を踏み締める。辻を越していよいよ親の家に近づく自分は、すでに為した事から遠ざかる、背中になった。

門の前に立つてことさらに標札を見あげる自分の体格が、この三カ月の間にも一段とまたいかつくなったのが自分でも見えた。両の腕を長く脇へ垂らしていた。掌は今まで物を握り締めていた形に半ば開いていた。大きな手だった。

風が吹き出して、裏山の葉が馬道の方角から順に裏を返して流れた。何もかも終わってこの動作もこのまますでに記憶となった心地がして門をくぐった。それでいて、これもじきに忘れてしまうので、今のこの自分を覚えていてくれ、と辻の方へ訴えるようにした。すこし猫背になっていた。

玄關に入って来た朝原を見るなり悪相を剥いて、何処の馬の骨だか知らんが、庭のほうへ回れ、と喉声で叫んだきり顎から喘いで崩れ落ちた父親を、母親は膝の上にやっとな受け止めて、早く逃げてと哀願するような、縋るような眼を朝原に向けた。